

## 特集：世界の城下町・彦根をめざして

# 彦根の町家の魅力 土戸(つちど)のある町家

彦根の魅力は、城郭とともに城下町にあります。16世紀に成立し「近世城下町の完成形」と呼ばれる彦根城下町は、時代を経るにしたがって変容しつつ、各時代の遺産をよく残しており、城下町の歴史上「きわめて希で、学術的な価値が高い」歴史遺産です。しかし、いま保護しなければその価値も失われてしまいます。今回は、滋賀県立大学 濱崎一志教授に彦根の町家の魅力について寄稿していただきました。

### 軒下の溝

中山道の高宮宿や鳥居本宿、高宮道沿いの七曲がりあたりの街道沿いの古い町家を見ていると、軒下の犬走りに一本溝を刻み込んだ細長い花崗岩の切石が一直線に敷かれているのを、見つけることがあります。この敷石の上に立って軒裏を見上げると、軒裏に2枚の板を樋端(ひばた)として貼り合わせた溝が残っていることがあります。この軒下の上下にある溝は土戸を雨戸のように引き出すためのものです。



鳥居本の町家の土戸

味噌で塗り込め、延焼を防ぐためのものです。火事の際のみ閉められるもので、普段は町家正面の左右どちらかにある土戸置き場に収納されていました。土戸を閉めたときに土戸の外側となる軒先の部分を塗り込



旧村岸家（七曲がり）

め、土戸より内側は防火の必要がないために塗り込めていない町家もあります。

### 土戸のある町家

土戸の痕跡は彦根では城下町よりも、中山道や高宮道などの街道沿いの町家を丹念に見ていくと、発見することができます。一本溝を刻み込んだ細長い花崗岩の切石しか残っていない場合がほとんどですが、土戸置き場が残っているものも数棟確認されています。土戸が確認されているのは彦根では二例だけです。



旧村岸家の土戸と置き場

### 旧村岸家（七曲）

旧村岸家も土戸をよく残している家で、向かって右に土戸置き場、軒下には土戸を引き出す溝が残っています。旧村岸家は七曲がりの角

に建つ江戸時代の町家です。屋根の両端に「うだつ」が揚がり、二階軒下の両側に袖壁がついています。袖壁は隣家の火災が二階へ延焼するのを防ぐためのもので、地域によっては「火返し」「火除け」などとも呼ばれています。二階正面の壁は漆喰で塗り込めた大壁に虫籠窓がつき、家全体で防火の構えをとり、江戸時代の町人の火災への備えを現しています。

(滋賀県立大学教授 濱崎一志)

**第6回 夢を持つこと…心のグランドデザイン**

今年の夏、北海道を1200km車で移動しました。移りゆく風景を楽しみ、連続的に移動することで北海道を体感できたように思います。富良野・知床半島・釧路湿原では、原風景としての自然の素晴らしさを楽しみ、道中では途方もなく続く耕作された畑（じゃがいも畑、花畑）と原生林との調和に人の偉大さと自然への限りない愛情を感じ、至福の時間を過ごすことができましたので、それにもまして感動を与えてくれた風景に出会うことができました。



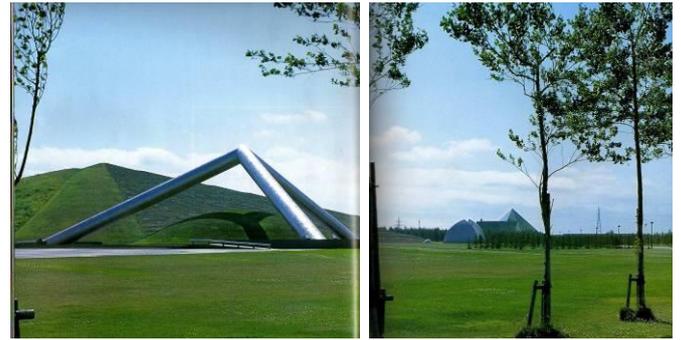
それは初日に訪れた札幌郊外にある『モエレ沼公園』で、そこでの印象が鮮烈であり、夢を持つことの意味を改めて考える機会となりました。

イサム・ノグチが構想を練り、彼の死後15年を経て2003年に完成した公園です。記録には『札幌の



中心から北東へ8km、蛇行した豊平川の一部が三日月湖として残された水面に囲まれた約100haの土地は、まだ盛んにトラックが出入り

するゴミの埋立地で、強風にビニールゴミが舞っていました。「ここにはフォルムが必要です。僕のやるべき仕事です。」とイサム・ノグチはそこが長年の夢の実現の地と予感し、嬉々として残った雪の中へ歩き出した。』とあります。

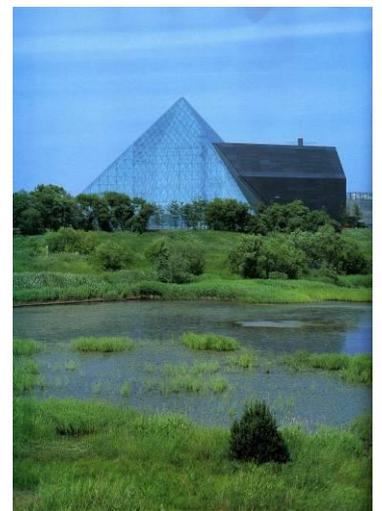


壮大な北海道の大地を彷彿とさせ、カラマツ林、高さ30mの人工のプレイマウンテン、3000本の桜、庵治石積とガラスのピラミッド。人の夢と創造力がうまく調和した景観が目の前にあり、近づき、そこへ足を踏み込んだ途端、やさしい時間が流れます。研ぎ澄まされているからこそその“やさしさ”がありました。その後感じたまさに北海道での人の営みと自然との調和の素晴らしさが凝縮しているのです。

そんなことを少し忘れてしまっていた自分に気づかされました。目先のごまごまとしたこと（短期的な経済効果、無責任な批評等）によって、夢が覆い隠されてしまわずに、10年50年をかけて創り上げてゆく“夢”を持つことが大切で、その実現へのエネルギーの構築こそが今、必要とされているのだと思います。

築城400年祭がそれらの契機になり、市民一人一人が『心のグランドデザイン』を画ければと思います。

10回シリーズの中間点なので、閑話休題ということで……。

**「星空映画祭」無事終了**

夏の名物「星空映画祭」が8月27日に、新しく生まれ変わった四番町スクエアの中央ガス灯広場で開催され、約200名の人に参加されました。

寺尾聰主演の『雨あがる』では、彦根城の天秤やぐらや周辺が映り、樺御殿（現・楽々園）も後半に登場しました。開始当初は、映画自体の暗さと、陽が沈みきっていない薄暗さ、お店の明かりで観にくい状態になりご迷惑をかけたが、その後は十分楽しんでいただいたようです。

さて来年はどんな映画が上映されるでしょうか。1年後のお楽しみに……。

